
蛇帯

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

蛇帯

【Nコード】

N8075E

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

おそのは亭主の甚平の帰りがいつも遅いことに腹を立てていた。そして遂にある日彼女の帯が自然に解け。御主人方、夜遊びも程々に。

第一章

蛇帯

「全くうちの宿六つてきたらね」

長屋の入り口において。女房達が仕事の合間に世間話をしていた。その中の一人、一際むくれっ面になっている赤い着物の女がぶつくと文句を言っていた。

「毎日毎日帰りが遅いんだから」

「帰りが遅いっておそのさん」

「ひよっとして旦那さん」

その女おそのの言葉を聞いて周りの女房達が彼女に対して尋ねる。

「甚平さんひよっとして」

「若い娘を囲つてるんじゃない」

「生憎そんな奴じゃないんだよ」

おそのはむくれながらこう答える。浮気ではないというのだ。

「あいつは女には奇麗なんだよ」

「そうなのかい。そういえばそうだったね」

「そっちの方はあの人はね」

「奇麗なものさ。それでもだよ」

まだ彼女は言う。それでも。

「全く。博打博打って」

「そう、それだよ」

「あの人はそれが大好きだからね」

「帰りが遅くていつもこっちはいい迷惑だよ」

今度は口を尖らせての言葉だった。両手を腰に置いたうえでなので実に迫力がある。角が今にも生えそうである。鬼婆である。そうとしか見えない。

「待つ身はね」

「男つてのはそういうの考えないからね」

「全くだよ」

女房達は笑っておそのに対して述べる。

「うちの亭主は酒だしね」

「うちも」

彼等の亭主達も彼等は彼等で勝手なものだったのだ。何時でも何処でも男というものは実に勝手なものである。彼女達にとってみればそうである。

「我儘なんだからね」

「たまには子供達の世話でもすればいいのね」

「全くだよ」

おそのの顔がさらにむくれる。

「手前の仕事だけやってればいいってもんじゃないだよ」

「全くだよね」

「本当にわかかってないんだから」

めいめいこう言い合う。言い合っていて次第に腹が立つのも収まってきたのだった。おそのの顔もそうなってはきていた。しかしそれでもであった。

「今度帰るのが遅かったらね」

「どうするんだい？」

「目にものみせてやるわ」

「こう言いきるのだった。」

「今度こそね」

「さて、どうするんだい？」

「帰ってきたらすぐに頭から水を被せてやるのかい？」

「それはもうやったよ」

「やったというのだ。これまた随分と気が強い。」

「やって二三日は大人しかったよ」

「二三日かい」

「二三日経ったらまただよ」

やはりまた顔がむくれてきた。

「全く。ふざけた話だよ」

「懲りないねえ、甚平さん」

「本当にね」

「だから今度は何してやろうかしら」

むくれた顔で言葉を続ける。

「今度は」

「まあ何か考えた方がいいわね」

「それはね」

彼女達もそれは勧める。

「やられつぱなしじゃね。女房の顔が廃るつてもんだよ」

「女は強いんだよ」

実際にここで腕に力瘤を作ってみせる。見ればかなりのものだ。

「それもかなりの」

「それを見せてやらないとね」

「全くだよ」

そのおそのも断言するのだった。

「絶対にね。今度は二度と博打ができないようにだね」

「してやるんだね」

「ああ、絶対にね」

また答えてみせる。

「やってやるさ。何があっても」

「その意気だよ」

「頑張るんだよ、おそのさん」

女房達も笑顔でおそのにそれを勧める。女は怖い。

「何があっても甚平さんに一泡吹かして」

「ぐうの音も言えないようにだね」

「見てるがいいんだよ」

また鬼婆の顔になっていた。本当に今にも角が見えそつだ。本来は歳はいつてるが目が大きく結構可愛い顔立ちなのに完全に鬼の顔になっていた。

「ギャフンと言わせてやるからね」

「そうそう、ギャフンとね」

「一捻りでね」

ぎゅっと首を捻る動作までしてみせる。おそのはこれで決意した。そしてそれはその晩早速。そうした事態となつたのであつた。

「お父ちゃん遅いね」

「またサイコロ？」

長屋の部屋の中で。子供達が目をこすりながらおそのに対して尋ねている。灯りは行灯の薄暗いものでありもう布団が敷かれている。その中でおそのも子供達も寝巻きに着替えて今まさに寝ようとしていた。しかし亭主の甚平がまだ帰ってきていないのである。子供達もそのことを尋ねているのだ。

第二章

「待つもの？母ちゃん」

「やっぱり」

「御前達は待たなくていいんだよ」

おそのはむくれた顔で子供達に対して述べた。

「いいね、わかったら寝る」

「寝ていいんだ」

「子供は早く寝るのが仕事だよ。わかったらほら」

「うん、じゃあ」

「おやすみ、母ちゃん」

子供達はおそののその言葉に応えて仲良く布団の中に入りそのまま寝付いてしまった。だがおそのはそうもいかずむくれた顔で扉になっっている障子に目をやっていた。障子の向こうは真っ暗闇であり何も見えはしない。ただ行灯の灯りが彼女の顔を照らし出していた。「いつもいつも」

歯を剥き出しにしつつ呟く。

「帰りが遅いつたらありやしないよ。博打ばかりやって」

そのことに対して怒ることしきりである。顔を俯けさせてかりかりしっぱなしだった。その怒りは収まるどころがない。そして遂には。思わぬことが怒ったのだった。

「おや！？」

何と彼女が締めていた帯が一人でに動きだしたのである。黒く細長い瘦せた帯がだ。

「帯が。どうしたんだい？」

それが動いたのを見て驚いていると。やがて帯は彼女から離れていき何と蛇になった。おそのもそれを見てあっと驚くが蛇はそれよりも早く部屋を出てしまっていた。

「帯が蛇になって。夢でも見てるのかね」

「こう思っていた。とりあえず自分は寝ているのかと思った。ところが暫くして。外からやけに騒がしい男の声が聞こえてきたのだ。た。

「おい、離せ」

「おや!？」

それはおそのの聞き覚えのある声だった。まずはその声を聞いて目を動かした。

「今の声は」

「だから離せって言ってるだろ」

また声が聞こえてきた。

「一体何なんだよ、こいつは」

「御前さんかい？」

その声が自分のいる部屋の前まで来たところで立ち上がって扉を開けると。そこに小柄で出っ歯の男がいた。彼女の亭主の甚平である。その博打好きのどうしようもない亭主だ。彼は夜の長屋と長屋の間の道を転がりつつ何かに対して必死に怒鳴っていたのである。

「折角楽しくやっていたのによ」

「また随分変わったお帰りだね」

おそのはまだ喚いている亭主に対してまずは嫌味を贈った。

「一体全体何があったんだい？」

「何もって御前」

甚平は夜の中でもわかる程泥だらけになってしまった顔をおそのに向けて言ってきた。闇夜の中で目と出っ歯の白だけが浮かび上がる。

「この蛇にな」

「蛇!？」

「だから蛇だよ」

また言ってきたのだった。

「蛇に巻きつかれてここに連れて来られたんだ」

「蛇ねえ」

おそのはそれを聞いていぶかしむ顔になった。それを見て甚平も女房に対して尋ねるのだった。

「ひよつとしたら何か知ってるのか？」

「その蛇って黒い蛇かい？」

「ああ、そうだよ」

不機嫌そのものの顔で女房に答える。

「ほら見る、これがその蛇だ」

「ああ、やっぱり」

おそのは月明かりを頼りにその蛇を見て。納得した顔で頷くのだつた。

「その蛇だよ、知ってるよ」

「蛇に知り合いがいるのかよ」

「だから違うんだって。いいかい？」

「ああ」

「その蛇はね。あたしのなんだよ」

納得した顔にさらに笑みを加えて述べる。

「あたしの蛇なんだよ」

「！？馬鹿を言え」

甚平は今のおそのの言葉に顔を顰めさせて反論する。

「おめえの蛇だつてのか」

「そうだよ」

その問いにもこう返事を返す。

「あたしのなんだよ」

「馬鹿を言え。うちには蛇はいねえぞ」

「それがいるんだよ」

しかしおそのは笑ってまた言うてくるのだった。

「わからないかい？」

「どうわかれていうんだよ。何が何だかよ」

「まあ出て来たっていうか変わったっていうかね」

「変わった!？」

「そうだね。こう言えばいいね」

今度はこう言うのだった。相変わらず笑いながら。

「わかりやすいね」

「何が何だかわからないんだけどよ」

「帯だよ」

遂に答えを出してきた。

「あたし今帯してないだろ」

「んっ!？」

その言葉を聞いておそのの腹のところに目をやる。すると本当に帯がない。実にすつきりとしているがそれと共に何処か寂しくもあつた。

「そういえばそうだな」

「あんたを待つていて腹にすえかねていたらね」

「ああ」

「帯が蛇になつて家を出て行つたんだよ」

「何だつて!？」

それを聞いて驚くことしきりだった。これも無理のないことだった。何しろ最初はおそのもかなり驚いたのだ。それは隠せなかつたのだ。

「それは本当なんだろうな」

「嘘を言つてもはじまらないだろう?」

疑う夫に対して答える。

「そうじゃないかい?」

「まあそれはそうだけれどよ」

「そういうとき。それであんたを捕まえに行つたんだよ」

「何てこつた」

そこまで聞いて思わず溜息をついた。折角楽しい思いで博打に精を出していたのと思ひそれが非常に残念であつたのだ。

「そんなことになるなんてな」

「それもこれも御前さんが悪いんだよ」

一瞬で笑顔から口を鳥みたいに尖らせてきて述べた。

「いつつもいつつも夜遅くまで博打してさ」

「勝ってるからいいじゃねえか」

「そういう問題じゃないよ。仕事が終わったら家に帰る」

厳しい声で告げる。

「そういうことだよ」

「そう思うおめえの心が蛇になったってわけかい」

「これで納得したかい？」

「納得したくはねえな」

この態度は相変わらずだった。

「そんなことはな。全く」

「けれど納得するしかないでしょ」

「ちっ、忌々しい」

だが仕方ないというわけだった。紛れもない本音である。

第三章

「納得してやるぜ」

「それでいいんだよ」

「それでだよ」

相変わらずの態度でまた言ってきた。

「何だい？」

「これ、解いてくれねえか？」

蛇になった帯を解くように言ってきた。

「いい加減苦しいんだけれどよ」

「解いて欲しいんだね」

「そうだよ」

ふてぶてしい様子は健在だった。それにおそのは内心腹を立てていた。それで少し意地悪い顔をして亭主に対して言うのであった。

「じゃあそれでいいけれど」

「じゃあ早くしろよ」

「条件があるね」

「こつ言つのである。」

「条件がね」

「条件!？」

「そうだよ」

そしてまた言ってきた。

「あんた、もう博打を止めるんだね」

「何だつて!？」

「それで毎日早く帰る」

続いてこつ言つのだった。

「それを守るんだね。いいね」

「何だよ。もう博打はするなつてことかよ」

「そうだよ」

またきつぱりと告げたのだった。足元に転がっている亭主に対して。

「それを約束してくれるんならいいよ」

「馬鹿を言えっ」

当然聞く筈がなかった。一言で言い返す。

「俺が博打を止めたらどうなるかわかってんのかよ」

「どうなるんだい？」

「死んじまうよ」

これが反対の根拠だった。

「そんなことになったらな。だから駄目に決まってるだろ」

「じゃあ嫌なんだね」

「当たり前だ」

やはりこう答えた。

「何があってもそれだけはするかよ」

「何があってもかい」

「死んでもしねえ」

こうまで言い切ってみせた。

「何があってもな」

「わかったよ。何があってもなんだね」

「そうだよ」

また言い切ってきた。

「それだけはしねえからな」

「そうかい」

「そうだよ」

またしても言い返す。

「何があってもだ。何度でも言っぜ」

「わかったよ」

おそのは一旦亭主のその言葉を受けた。

「御前さんのその心意気をね」

「わかったら早く解け」

本当にふてぶてしい。しかもそれを隠そうともしない。

「いいな」

「わかつたよ。その前に」

「何だ？」

「顔を上にあげてみなよ？」

「こつ亭主に言つのだつた。」

「そのままね」

「上にだつて？」

「それでも言えたらいいよ」

おそのは笑っていた。闇の中で凄みのある笑みを浮かべていた。そのうえでの言葉だったのでこれはかなり凄みのあるものだった。

これには甚平も何か得体の知れない恐怖を感じた。その恐怖にも誘われて言われるがまま上を見上げる。するとそこにあつたのは「

「なつ……」

「どうだい、御前さん」

勝ち誇つたおそのの声が甚平の耳にも入って来た。

「これでも言えるかい？」

「うう……」

呻くだけで声が出ない。何故なら丁度頭上に蛇の頭があつたのだ。しかもとてつもなく大きな口を開けて今にも彼を頭から飲み込もうとしていたのだ。これでは声も出ないのも当然だった。

「さあ、どうするんだい？止めるかい？」

「止めなかつたらどうなるんだ？」

彼は女房にこつ問うた。あえて止めなかつたら、と言つたのだ。

「その場合は」

「わかつてると思うけれどね」

またおそのの勝ち誇つた声が聞こえてくる。

「御前さんが一番ね」

「じゃあこのままぺろりか」

「蛇に飲まれるのがいいか博打を止めるのがいいか」

「二択であった。」

「さあ、どっちだい？」

「ちっ」

その言葉に答える前にまずは舌打ちしたのだった。

「わかったよ」

実に忌々しげだがこう答えてきた。

「止めるよ。止めればいいんだろ」

「そういうことだよ。止めればいいんだよね」

「流石に俺も食われたくはないさ」

そういうことだった。誰でも食べられたくはない。食べられる位なら、というわけだ。それで甚平もこう答えたのである。もっとはつきりと言えば答えるしかなかった。

「だから。それでいいさ」

「じゃあそういうことだね」

おそのが満足した笑みを浮かべると蛇はするちと甚平の身体を離れておそのの服に戻った。そうしてすぐに普通の帯に戻ったのだった。

こうして甚平の博打はなおった。それと共におそのの癩癩もなくなりそれと共に帯が蛇がなくなるようなことはなくなったということだ。江戸時代浅草に残っている話である。江戸っ子の女房というものは何処までも癩癩が強くそれが蛇となったということであろうか。

蛇帯 完

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8075e/>

蛇帯

2009年7月3日19時04分発行